

はじめに

私ごとですが、今年、高野山で修行を終え十年を迎えます。山を下りた当初、「葬式仏教」「寺は閉ざされている」等々、日本の仏教に対する風当たりは強く、僧侶としてどのように歩むべきか悩んでいました。それから程なく直木賞作家・天童荒太さんの『悼む人』を読む機会がありました。

主人公の静人は縁もゆかりもない不慮の死を遂げた人の墓を訪れ、独特のポーズをとって死を悼む、という一見奇怪な行動をとります。不審がって静人を避けようとする遺族がいる一方、亡くなった人の背景や遺族の気持ちにただひたすら耳を傾ける静人に心を開き始める遺族もいました。

主人公の悼む姿に僧侶としてできることを見出して以来、亡き方がどのような人柄であったのか、どのような最後を迎えられたのかを残された方と共有することで、亡き方に思いをはせるようになりました。

戦争の聞き取りも、お盆勤めで檀家さんから紡ぎだされる思い出話から出発しました。

歴史学者でも、社会活動家でもない一平凡な尼僧ですが、この聞き取りを通して戦争という歴史の大波の中で大変な苦勞をした方々を悼むことができ、また聞き取りの内容が戦争と平和について考える一助となることができればと願っています。

戦争の思い出を語ることは時として封じ込めていた悲しみを開くことにもなりますが、今回も複数の方に快く聞き取りに協力していただきました。改めてお礼申し上げます。

合掌

平成 28 年大暑

蓮華寺副住職 浦山慈水

広がった聞き取り活動

昨年、多くの方々に支えられて開催した平和の催し・第一回「平和への祈り」の後、福山市立今津小学校六年生の生徒さんに戦争の聞き取りをお伝えする機会を得ました。師範学校^{しはん}を卒業し中学校の教員になったのもつかの間、硫黄島^{いおうとう}の戦い^{ぎよくさい}で玉砕をした青年・矢野卓衛^{やのたくえ}さんのお話しをしました。生徒の皆さんから届いた感想文を一部紹介します。

「卓衛さんはせっかく先生になりたいという夢をかなえたのに、かわいそう」

「死をかくごした卓衛さんの遺書が心にのこりました」

「日本軍はアメリカの約三分の一しかいないのに戦い、サウナより暑い地下ですごしていたと聞くと、とても過酷^{かこく}で戦争の怖さが分かった」

「どうして戦争をしなければならなかったのだろう。死んだ人たちの人生は終わっていなかったのに」

「私のひいおじいちゃんも戦争に行っていて、背中に銃の玉が通った跡がありました。戦争のことは忘れない」

「この話しをきいてああそうなんだ、で終わるんじゃなくて、みんなに戦争のこわさをおそろしさを伝えていきたい」

また、「けんかは戦争と同じようなものだから友達を大切にしようと思った」というように、「国と国」の争いばかりでなく「人と人」の争いについて振り返り、普段の生活で活かしていこうとする姿勢も多くなってきました。

このような機会を与えてくださった今津小学校の校長先生をはじめとする先生方に感謝いたします。

託された被爆記録

昨年9月、NHK 広島「おこのみワイド」に出演させていただきました。著者が戦争体験を聞き取っている様子を見られた方が、蓮華寺の近くに住む友人を通して「被爆記録」を託してくださいました。その記録を書いたのはその方の親戚である下田一良さんでした。二年前下田さんが亡くなった時、タンスにしまわれていたこの被爆記録が親族によって発見されたということです。

細かく書かれた手記を受け取った時、70 年間に秘めていた「伝えたい」という気持ちの重さをずっしりと感じ取りました。原爆投下時、下田さんは16歳の少年でした。現在、この被爆記録は原爆資料館に収められているということです。

被爆記録

被爆投下

昭和20年8月6日8時15分

当時はピカドンといていた。広島市細工町八丁目の島外科病院の南東約25mの地点、その上空約580mで炸裂した。

その日朝一番の汽車で、作業現場に行く祇園(地図①)手前で空襲警報があるもすぐ解除になる。横川駅(地図②)に着き、そこから市内電車で現場に着いた。原爆投下時は勤務先の堺町7丁目(地図③)、祇園町の三菱重工の命令で爆弾による火災の類焼家屋の解体作業で一戸を倒して休憩。(当時、機械類は無く柱に切れ目を入れてロープで引っ張って倒す。)



ようやく一戸を倒して休んでいると、米国のB29の機影が見えたとおもった瞬間一閃光。

後はどうなったか分からない。しばらくしたら「こちらの方から出られる」との声がするので出ようとする、痛い痛いという人と人の間に挟まれていた。

倒壊家屋よりなんとか抜けて声のした方へ行く。出てみてまたビックリ。周囲に家は無く骨組みだけ残ったビルだけ。あちこちで火災が発生している。倒壊家屋の上を歩いて道に出よ

うとすると、足もとで「助けて」と声がするので友達と板切れ、柱等を片付け助け出す。

そのうち火災が近付いて来たので道に出る。「己斐^{こい}方面へ行け」という指示。己斐方面(地図④)に行く途中が大変だった。川の中、防火用水の中に人がいっぱいいた。水をほしがる人。亡くなった人がいっぱい。水をあげてはいけないと言われるのでほっといて逃げる。

途中がまた大変。大怪我をした人、亡くなった人、「下田さん 下田さん」と呼ぶ声。近付いて見ても誰か分らない。よく見ると会社の女の子。「歩けるか」と聞くと「歩けない」という。仕方が無いので、背負^むってみると痛がる。よく見ると皮が無い。尻に手をかけると皮がズルズルと剥ける。どうすることもできないので、「我慢してくれ」と言いながら、ようやく己斐小学校に着く。「会社に帰って元気な人に迎えに来てもらうから」と言って、可哀想だが別れる。

それから案内する人について山を越えてどれくらい時間がかかったかわからないが祇園の会社に着くことができた。

会社で飲み物を頂く。それが美味しかったことを今でも忘れない。その日は会社で怪我した人の手当や、排便の世話をしていると8月7日の朝になった。

家に帰ろうと思い下祇園駅へ行く。電車がいつ来るか分らない。待っていると来た。時々止まるがようやく可部駅に着く。ここから歩いて帰るしかない。何時ごろ家に着いたかわからない。帰ったら家の前に大八車^{だいはちくるま}が出してある。聞いてみると「広島が爆弾で駄目になったと言うので、お前を探しに行こう」と思ったのだと言う。「市内に行っても何もないから駄目だ」と説明してもなかなか本当の事が通じない。

「眠いから寝かしてくれ」と言って眠る。夕食を食べながら6日の話になると大変。いくら話してもなかなか通じない。「とにかく建物の骨組みしかのこっていない」と説明する。市内で大変な事が起こっていることを何とか分かってもらえたと思う。

しばらく会社に行かないで家にいると頭の髪の毛が抜けるので医務室に行ってみる。友達も来ている。みんな会社から見舞金と休暇を頂く。見舞金としての金額に記憶はないが沢山戴いた。

ピカドンには温泉が良いと聞き、別府温泉^{かんなわ}に行った。歩いてホテルを探して、地下に温泉がある宿に決めた。今考えると鉄輪温泉であった。しばらく泊まっ

て帰ることにした。

この原爆にあったことで多少差別があった。結婚に多少の問題があったが、私にはあまりなかった。幸い、いい人に恵まれ三人の子供も元気に育ってくれた。

下田 一良

終戦間近招集された父 父不在の間、家族を支えた母

岡田良三さん(86) 福山市松永町在住

1929 昭和 4 年 11 月	沼隈郡松永町に生まれる
1941 昭和 16 年 4 月 12 歳	松永小学校卒業
1943 昭和 18 年 3 月 14 歳	松永小学校高等科卒業
1946 昭和 21 年 3 月 17 歳	松永商工専修 木工卒業

11 月で 87 歳を迎える岡田良三さんは、腕の良い瓦職人として全国の伝統的な建造物の瓦を葺き替えられてきました。ご隠居となった現在でも自転車で色々な場所に通われ、お元気でいらっしゃいます。かつて蓮華寺主催の四国八十八箇所霊場巡礼に参加していただいていたご縁で、今回快く聞き取りに応じてくださいました。15 歳で終戦を迎えた良三さんは、少年時代の思い出を語って下さいました。話の始めに、おじい様のことに触れられました。



岡田さんが修復に携わってきた歴史的建造物の瓦。中には法隆寺の瓦も。

私の祖父は^{このえきへい}近衛騎兵として東京の御所に仕えたことがあります。近衛兵になるには「肥えても無く、やせても無く」ちょうどよい体格でなければならできませんでした。

自宅に残っているおじい様の写真からすると、明治 20 年代(今から 120 年ほど前)のことだそうです。当時の徴兵制では、明治天皇を直接お守りする近衛兵(護衛兵)は成績優秀な現役兵から選ばれていた(『日本史広辞典』山川出版参照)ので、一族から近衛兵が出ることは名誉なことだったのだらうと、岡田さんのお話からも想像できます。

父・英夫は 20 歳で^{ひでお}徴兵されて以降、終戦前年の 37 歳まで招集を受けることはありませんでした。20 歳の時、福山の^{れんたい}41連隊*を代表して銃剣術で優勝したことがあるほど、兵隊としてはきっと実力があつたと思われるのですが招集されなかったのです。父が招集されるまでの十数年の間は日中戦争、太平洋戦争などが起きて、数多くの 20 代の青年が戦地に送り込まれた期間です。ですから父は「付け落ち(帳簿などに品物の価格・数量などが抜け落ちること)」と周囲から言われていたようです。

父親は非常に厳しい人で、仕事から帰ってきて開け閉めしたふすまの音で機嫌が分かるので、母親がよく子供たちに注意を促していました。食事中、もし父親に口答えしようものならモノが飛んできました。

その父親は昭和 19 年に招集され、広島に入隊しました。東京へ行き、捕虜^{ほりよ}に製粉の仕事をさせるのを監視していたそうです。左官^{しゃかん}(壁を塗る職人)の仕事をしていた関係からか、上から命令されて、左官の作業をするため途中道具を取りに帰って来たのを覚えています。戦争が終わり、連絡はずっととっていなかったのですが、その年のうちに松永に帰って来ました。厳しい父親とはいえやはり嬉しかったです。

*【連隊】明治時代以降、ヨーロッパ諸国を参考にして、日本陸軍は下から、分隊—小隊—中隊—大隊—連隊—師団というふうに、分隊を最小単位とするピラミッド式組織を作りました。師団本部は東京・大阪を含む全国に 6 か所あり(中国地方では広島)、連隊本部は各都道府県の一定規模以上の都市に設置されました。その連隊には通常 1000 人～3000 人所属し、福山歩兵第 41 連隊は、現在の福山市緑町周辺(バラ公園や緑町公園あたり)にあったということです。(wikipedia、<http://www.kkochan.com/>、戦争に詳しい方からの聞き取り参照)

自分で言うのは何なのですが、私は小さい頃から手先が器用で、小学校の高等科を卒業した後は松永商工専修^{まつながしょうこうせんしゅう}(著者注：現在の福山市立松永中学校内にあった)の木工科に進みました。15,6 歳の頃でちょうど戦争末期にあたり、学徒動員令^{どういんれい}*によって、川崎(著者注：おそらく会社の名前)の下駄工場^{がくと}で、兵隊さんが監視する中、軍で使用する家具を作っていました。軍用の汽車に寝台を取り付けるため、松永から呉に行ったことがあります。一週間、軍と同じ生活をしていました。

学校では戦死者の名前を書き入れる額縁^{がくぶち}も作っていました。かなり需要があったので「多めに作っておこう」と先生に言われた時、「それでは兵隊さんが死ぬのを期待しているみたいではないですか」と、先生に意見をすることもありました。

*【学徒動員】太平洋戦争下における労働力不足を補うため、学生・生徒に対して強制された勤労動員。1938 年公布の国家総動員法に基づいて実施され、戦争の深刻化につれて拡大。1944 年には学徒勤労令が出され、中等学校以上のほぼ全員を軍需工場などに動員・配置した。『広辞苑』

(終戦の年)8月8日の福山空襲の日の夜は、ちょうど自宅の縁^{えん}に座っていました。空が真っ赤でした。下から砲撃していてもB29に届いていないのが見えました。

戦争中、食べ物がなくて困りませんでしたかと著者が尋ねたところ、

農家をしていた母の実家(現・福山市本郷町)には本当によく援助してもらいました。海に近い松永から魚を持っていき、帰りの自転車にはお米や野菜をたくさん積んでもらったものです。

岡田さんは六人兄弟の長男。お母さまの手足となって、お父さまが不在の間、家族のためにお遣いをしていた様子が目に浮かびます。

母親の実家は農家の傍ら、馬喰^{ばくろう}といって牛を売買していたので、金銭的にはあまり困っていませんでした。母はタンスに着物をたくさん入れて嫁入りしたのですが、それからは苦勞の連続でした。一年中働き通しです。

実は、お母さまの実家には跡取り^{あとと}となる弟さん(岡田さんの叔父さん)がいたのですが、日中戦争の時に亡くなられたそうです。

叔父・素^{はじめ}は地元の青年団でも「模範青年^{もはんせいねん}」と言われるくらい真面目な人でした。家の畑では、いつ何を植えるべきか几帳面^{きちょうめん}にノートをとっていました。農作業の合間に、岡田家の左官業も手伝ってくれていました。支那事変^{しなじへん}(当時日本では日中戦争ではなく支那事変と言っていた)の時、叔父はケガをして護送車で野営^{やえい}地に送られることになっていたのですが、それを断り、そのまま出陣して亡くなりました。戦友が右手親指を持って帰って報告してくれました。

すでに母の父親は亡くなっており、母の妹と祖父が実家に残っていましたが、母は嫁ぎ先の左官業の仕事や育児の傍ら、実家の畑の世話をしていました。他にも(畳表^{たたみおもて}のための)イ草^{いぐさ}も植えていたので、寒い時にイ草の苗を植え、暑い時に刈り入れをしていました。畳表も、普通の人が1枚仕上げるところ、母は3枚作っていました。休む暇などなかったことでしょう。

戦後、良三さんは木工関連業の後、左官業を務めていましたが、偶然にも、瓦の葺き替えを全国で手掛けている腕利き^{とうりき}の棟梁^{とうりょう}に才能を見出されました。その後岡田さんは歴史的建造物の瓦の葺き替えのため、全国を回りました。

法隆寺^{ほうりゅうじ}や皇居の瓦も手掛けたこともあります。出会いとはすばらしいものです。恵まれた人生だったと思います。

晩年は母を家で看取ってあげました。ある日、お風呂に入れてあげたことがありました。いつもより丁寧に体をこすってあげると「きもちいい、きもちいい」と喜んでいました。

厳しい父親の影となり子供たちを暖かく支えてくれた母。父のいない二年間、家族を守ってくれた母。お母さまはその翌日亡くなりました。その日は11月11日。良三さんの誕生日だったということです。

大変な時期を乗り越えた母と息子の強いきずなを感じるのは私だけでしょうか。

原爆投下 4 日前に広島陸軍に入隊、 息子が生れる 2 日前に亡くなった父

や の せいきち
矢野清吉さん

語り手 矢野清和さん(70)

尾道市在住

1918 大正 7 年 9 月 10 日

矢野清吉さん ^{ぬまくまくん} 沼隈郡今津町に生まれる

1938 昭和 13 年 20 歳

10 月 9 日

^{うじなこう} 宇品港出発

10 月 18 日

(中国)^{ハンコウ} 漢口港着

1943 昭和 18 年 24 歳

4 月 4 日

福岡県八幡市に着く

4 月 10 日

^{げんえき} 現役が明け、予備役となる

1944 昭和 19 年 25 歳

1 月 10 日

呉海軍に普通工員として徴用

この期間に

^{なかつかさ} 中司アサ子さんとお見合い結婚

1945 昭和 20 年 26 歳

8 月 2 日

広島第 102 部隊へ入隊

8 月 6 日

広島原爆投下で被爆

8 月 24 日

山口陸軍病院で死亡

8 月 26 日

清和さん生まれる

おやじは、私が生まれる 2 日前に亡くなっていました。母親はそのことを知らずに私を産んでいたと思います。その後母親は、苗字はそのまま実家に戻り、私たちは伯父さんの家族と共に過ごしました。母親は洋裁で身を立て、私は主におばあさんに育てられました。おじさん夫婦は自分の子供と分け隔てなく私に接してくれました。



おじさん家族と。

清和さん(下段。左から 2 人目)

父親が原爆で亡くなったことを私が知ったのはいつだったのか。それがはっきりしないのです。母親からもっと聞いておけばという思いはあります。父親のことをきちんと調べ始めたのは、母親の体が弱り始めたころからです。今から 10 年ほど前です。

清和さんは、父親のことを調べるため、厚生労働省や広島県庁に問い合わせた軍歴証明を取り寄せ始めました。

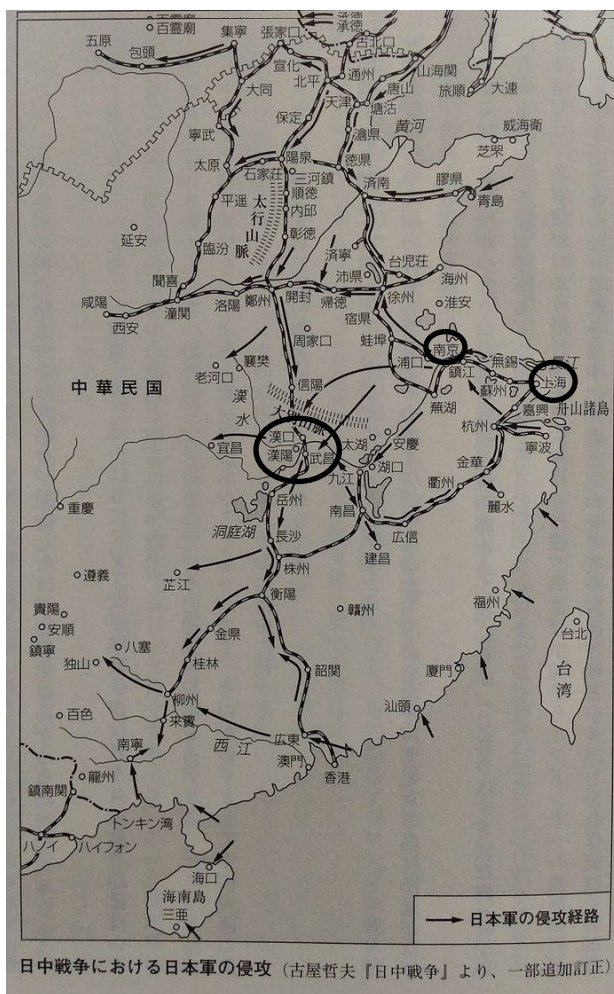
^{げんえき} 現役・^{よびえき} 予備役

現在、自衛隊は志願者によって構成されていますが、明治時代から終戦時まで、一般男子は一定期間、陸軍もしくは海軍に所属することが義務でした。い

いわゆる「徴兵制」です。20才を迎えた男性は徴兵検査を受け、その後抽選で選ばれた者は「現役」として2年間軍に所属します(海軍は3年間)。2年間「現役」として従軍すれば義務は果たされ、その後もしもの事態に備えて「予備役」として待機し、平常の生活を送るというものでした。実際に日本が戦争や紛争に関わった場合戦場に赴き、「現役」期間は延長されることもありました。(大江志乃夫『徴兵制』岩波新書参照)

私のおやじはまさに、戦争の真ただ中に青春時代を送りました。戦争中に20才を迎えた大正初期の生まれの男性は次々と戦闘要員に駆り出されました。あの世代は割を食らっていますよ。20才ぐらいといえば一番楽しい時期。そういうことができなかった世代ですね。

「十五年戦争」



「十五年戦争」という呼び方があります。「戦争」といえば「太平洋戦争」のみを連想しがちですが、十五年戦争の場合、1931年の満州事変^{まんしゅうじへん}までさかのぼり、日中戦争を経て、アジア・太平洋戦争終結の1945年までの15年間をさします。

おやじが20才^{ちようへいけんさ}で徴兵検査を受けた年は、日本が中国と全面戦争を起こしたちょうど翌年のことでした。誕生日を迎えた次の月にはさっそく中国の漢口に派遣されています。

清和さんが入手した清吉さんの陸軍記録と、『昭和の遺言十五年戦争』(文芸社)を参考に^{そくせき}して、清吉さんの足跡をたど

てみましょう(地図参照)。清吉さんはいわゆる「武漢^{ウーハン}*攻略」に関わったと思われます。



清吉さん(右)
日中戦争従軍時

*武漢：武昌・漢口・漢陽の三都市をあわせていう

まず広島^{ウーチャン}の宇品港を出て、上海^{ハンコウ}に到着した後、南京^{ハンヤン}を陥落させます。その後長江^{シャンハイ}をさかのぼり、漢口^{ナンキン}に到着。他のルートからやってきた部隊と合流し、武漢を攻略したと想像できます。

おやじが日本に帰ってこられたのは、日本から中国に渡って4年半後のことでした。昭和18年4月4日、中国から船に乗って福岡県の八幡に到着し、4月10日には現役が「満期明け」と軍の記録にあります。おそらくホッとしていたことでしょう。

20才だった青年・清吉さんは24才になっていました。当時の軍の記録は非常に詳しく、清吉さんのその後の履歴が記されています。

「昭和18年4月13日～11月8日 家事手伝い」

従軍後8カ月ほどは家の農業を手伝っていたようです。

「昭和18年11月18日～昭和19年1月8日 山中鉄工所」

今となってはその鉄工所がどこにあるのか分かりませんが、清吉さんは職を得ました。おそらく初めての勤め先だったのではないのでしょうか。当時、復員後、職を見つけることは非常に難しかったそうです。(『十五年戦争』参照)

「昭和19年1月10日 呉海軍工廠 普通工員」

せっかく職を得たのもつかの間、清吉さんは二度目の召集を受けます。次は兵隊としてではなく、いわゆる「軍属^{ぐんぞく}」として、海軍の艦船^{かんせん}・兵器などを製造する一連の工場群である「海軍工廠」で工員として働くというものでした。

その間、おやじは尾道市山波町^{さんばちょう}出身の母・アサ子とお見合い結婚をします。海軍工廠での休暇を利用してお見合いをし、結婚式を挙げたのでしょう。父が26歳、母が24歳、1944(昭和19)年11月27日のことです。



アサ子さん

じきに清和さんがお腹に宿ります。

間もなく赤ちゃんが生まれるという時、再び陸軍から召集がかかります。大きなお腹をかかえて清吉さんを送り出すアサ子さんの心境はいかなるものだったのでしょうか。そして、あと一か月ほどで生まれる我が子と身重の妻を残して再び従軍する清吉さんはどういう気持ちだったのでしょうか。

本土決戦

「本土戦場も期せ 一億一路戦力増強へ 首相談話」

昭和 20 年 3 月 27 日付朝日新聞

「本土決戦こそ最終決戦 一億必死必勝・前線に協力」

昭和 20 年 6 月 17 日付朝日新聞

「本土決戦」― 太平洋戦争末期、米軍を日本本土で迎え撃ち最後の決戦を行おうとした構想。作戦準備が進められたが、態勢の整わないまま敗戦を迎えた。『広辞苑』

戦争末期、日本の本土でアメリカ軍との陸上戦が行われることは時間の問題でした。昭和 20 年 3 月、硫黄島の戦いでは 2 万 2 千の日本兵のうち 2 万 1 千人が玉砕。その後沖縄では 4 月から 6 月にかけて陸上戦が繰り広げられ、一般人・軍人合わせて 18 万人余りの日本人が亡くなりました。すでに同盟国のイタリアとドイツは無条件降伏し、日本は世界で全くの孤立状態となっていました。陸軍は本州を中心とする本土での陸上戦の構えを崩していませんでした。（『日本史 B』 山川出版参照）

正式な記録は残っていないのですが、母が残した記録によると、
「昭和 20 年 8 月 2 日 広島第 102 部隊へ入隊」とあります。つまり、おやじは原爆が落とされる 4 日前に広島で陸軍に入隊しているのです。陸軍本部はまさにアメリカ軍が狙っていた場所です。あともう少し広島に入るのが遅ければ、もしくは、そのまま呉の海軍工廠で働いていれば、原爆に遭わなかったのです。

清吉さんは「本土決戦」に向けて、西日本の陸軍本部のあった広島に召集されました。

昭和 20 年 8 月 6 日朝。その日は快晴で、いったん空襲警報が解除され、広島の人々は日常生活を送っていました。8 時 15 分。世界で初めての原子爆弾が落とされました。もし清吉さんが陸軍本部で職務中であれば、爆心地 1 キロメートル以内にいたということになります。

(著者注：広島市 HP によると、爆心地から 1.2 キロメートルでは、その日のうちにほぼ 50%が死亡しました。それよりも爆心地に近い地域では 80～100%が死亡したと推定されています。また、即死あるいは即日死をまぬがれた人でも、近距離で被爆し、傷害の重い人ほど、その後の死亡率が高かったようです。)

おやじは広島市で被爆した後、山口陸軍病院に運ばれ入院しました。偶然にも親戚か知人が入院中のおやじに出会ったのです。「顔は焼けただれ、包帯で顔をぐるぐる巻きにしているの、声が出なかったら誰か分からなかった」と言っていたそうです。お骨はその方が持って来てくれました。

原爆投下後 18 日目。8 月 24 日、清吉さんは亡くなりました。そしてその 2 日後、妻・アサ子さんは清和さんを出産します。清吉さんの「清」の字を子供に使うことは事前に夫婦で決めていたのでしょうか。

(清和さん)ずいぶん後になって、私はエノラ・ゲイ*を見るために、アメリカのスミソニアン博物館を訪れたことがあるんです。

*【エノラ・ゲイ】広島市に原子爆弾を投下した戦闘用飛行機・B 2 9 機。

(著者)どう思われましたか？憎らしさとかは感じませんでしたか？

(清和さん)いや、もうただすごい機体だなと(著者注：日本のゼロ戦が全長 9 m 全幅 12m に対して、B 2 9 は全長 3 0 m 全幅 4 3 m)。戦争が終わって何十年も経っていますから憎しみはありません。ただ、日本で 70 年間戦争が無いのはありがたいことで、思想とか関係なく戦争はいけないと強く思います。平和憲法は大切にしてほしいです。

夫亡き後、洋裁の技術を身に着け、女手一つで清和さんを育てたアサ子さんは平成 21 年、享年 90 歳でお亡くなりになりました。清和さんは晩年寝たきりになったアサ子さんを介護されていました。最後はまるで導かれるように逝かれたそうです。

写真でしか会ったことのない父親。せめていつの日か親子三人でお墓に入り、あの世で三人仲良く過ごすことが、清和さんの夢だということです。

おしゃれをしたいという気持ちはいつの時代も変わらない

矢野^{はなこ}華子さん(90)

- 1925 大正 14 年 9 月 17 日 尾道市尾崎町で生まれる
- 1932 昭和 7 年 6 歳 筒湯^{つつゆ}小学校(2000 年に久保小学校へ統廃合)入学
- 1938 昭和 13 年 12 歳 久保^{くほ}小学校高等科入学
- 1940 昭和 15 年 14 歳 久保小学校工業科入学
- 1941 昭和 16 年 16 歳 12 月 8 日 太平洋戦争始まる
- 1942 昭和 17 年 16 歳 尾道郵便局電話科に就職
- 1945 昭和 20 年 19 歳 3 月 父が中国へ召集されるにあたり、母と弟妹達が大阪から尾道へ越してくる
- 8 月 15 日 天皇による降伏宣言
- 1946 昭和 21 年 21 歳 父が復員後、尾道へ帰ってくる
- 尾道の洋裁学校へ入学
- 1947 昭和 22 年 22 歳 祖母亡くなる

祖父母に大切に育てられた幼少時代

私は祖父母に育てられました。大切に育てられたと思います。毎年旧暦 3 月 4 日(新暦の 4 月初旬ごろ)には接待船(著者注:おそらく船主が功德^{くどく}を積むため、巡礼者^{じゆんれいしや}たちに船を提供していたと思われる)が尾道から出て、両祖父母に連れられて香川県の善通寺^{ぜんつうじ}*にお参りをしていました。曼荼羅寺^{まんだらじ}*でいただいた赤飯^{せきはん}がとってもおいしかったのを今でも覚えています。両祖父母は洋服を着たことなんか一度もありません。いつでもどこでも着物でした。

*【善通寺・曼荼羅寺】共に香川県善通寺市にある四国八十八カ所霊場札所。

矢野華子さんは大正 14 年生まれです。初めて四国に連れて行ってもらったのが 3 歳ぐらいの頃なので、昭和一桁代のことでしょう。太平洋戦争も始まっておらず、まだのんびりとした雰囲気伝わってきます。

華子さんの家庭事情は複雑でした。一人娘の母親は婿養子^{むこようし}を迎えて結婚したものの、事情があつて夫(華子さんにとって実父)と離縁。再婚後、母親は継父のいる大阪に移り住み子供をもうけます。華子さんは大阪に移ることなく、尾道市尾崎町の祖父母に育てられました。

祖父母は雑貨商を営んでいて、果物やチリシ(ティッシュペーパーのようなもの)などいろいろなものを扱っていました。祖母が商売上手で、接客から仕入れまで一人で切り盛りしていました。住み込みの店員も雇っていました。私を守りしていたのは祖父でした。



写真は、おばあさまと幼少期の華子さん。

家が浄土寺*のふもとにあったので、よく遊びに連れていってもらっていました。小学校1年から6年の間は浄土寺の日曜学校にも通っていました。決してお金持ちというわけではありませんが、不自由なく育ったと思います。大阪の親元からは離れていましたが、親がいなくて寂しいとかそういう気持ちはあまりありませんでした。母親は時々、尾道では売っていないようなおしゃれな洋服を、大阪から送ってくれていました。

*【浄土寺】聖徳太子創建と伝えられる、尾道市にある真言宗の古刹。「国宝の寺」として有名。

学生時代

小学校では女子組でした。「男女七才にして席を同じくせず」という言葉があるように、当時は男子と女子が親しくおしゃべりをするような雰囲気ではありませんでした。学校では「教育勅語*」を唱えていました。トイレに使う落とし紙（当時は新聞紙をトイレットペーパー代わりに使っていた）に天皇に関する記述が入っていないかチェックするのは当たり前でした。男子組は満州開拓団に入ることが勧められることもあったようですが、女子組ではそういう勧誘はありませんでした。

小学校の高等科を出た後、同じ小学校の工業科で2年間、主に手芸を学びました。

*【教育勅語】国民道德の基本、教育の基本理念を明らかにした明治天皇のお言葉。

就職と同時に太平洋戦争勃発 洋裁に目覚める

16歳の時華子さんは工業科を卒業し、尾道の郵便局電話科（電話通信は郵便局の管轄だった）に就職し、電話交換の仕事にたずさわりました。当時電話をかけるには、いったん電話科にかけて先方の電話番号を伝え、交換手につなげてもらう仕組みでした。

昭和16年、電話科に就職した年に日米開戦の火ぶたが落とされました。

当時の写真をみせていただきました。



この服は私の手作りです。生地はおじいさんの羽織をほどいて自分で縫い直しました。肩の曲線は当時の流行のものです。元々学校の授業で手芸を習っていましたが、就職してから改めて洋裁が好きになり、手縫いの洋服を作っていました。ミシンはありませんでしたから。

70 年前のものとは思えないほどのおしゃれなシャツを着て、髪型もきれいに整え、花を胸元に持ち、まるでスターのプロマイドです。ところが、別の全体写真をみると下はモンペのズボンに下駄といういでたちです。戦争中、おしゃれは禁止されていました。

下（モンペ）を見られると、恥ずかしいのよね。

と華子さんは言います。

「おしゃれをしたい、きれいでいたい」
物資も乏しく、おしゃれをすることを禁じられていた戦争中でも、女性が抱く願いはいつの世も同じなのでしょう。

モノが無くてつらかった

ところであと数日で満 90 歳を迎えるという華子さんは、おしゃれな身なりをされ、「おせんべいもご自分の歯でしっかりと噛んでいる」ほど^{かきしゃく}豊饒としていらっしゃいましたが、戦争中のことになると「モノがなくて、食べるものもなくてつらかった」と辛そうに語っていらっしゃいました。



電話科の人たちと。個性的なモンペがそろそろ。

戦争中はモノがなくて、両祖父母の店は売るものもなく活気はありませんでした。海が近くにあったので魚はありましたが、食べるものも着るものもありません。祖母が主に物々交換をして食料を確保してくれており、着物を農家の作物と交換していました。何もなくて辛かったです。

太平洋戦争が始まる以前から物資は軍に集約されつつあり、終戦の昭和 20 年までの間、生活必需品のすべてが政府の統制下におかれ「自由販売」は厳しく禁止されました(『新日本史 B』山川出版参照)。尾道の隣の市である『福山市史』を参考に一部を紹介します。

昭和 13 年 石炭節約のため朝風呂廃止
昭和 14 年 白米使用禁止(玄米や麦と混ぜることがすすめられた)
昭和 16 年 広島県下で節分の豆まきが廃止
バス・タクシーのガソリン使用禁止
昭和 17 年 衣料品や味噌・醤油 切符制
昭和 19 年 家庭用砂糖配給停止
古ハガキに切手を貼って 2 回使用を許可
昭和 20 年 衣料切符の交付をしないことを決定

昭和 20 年の 3 月に、大阪の父が中国へ召集されたのに伴い、母親と弟妹が尾道へ引っ越してきました。尾道には 2 つの家があったのですが、類焼を避けるため建物疎開*で 1 つの家は壊されていたので、一つ屋根の下で私たち 3 人と新たに 5 人を迎え、8 人で暮らし始めることになりました。

母親たちが尾道に着いた日に大阪大空襲*があり、大阪の家は全焼しました。父親が中国に発つ前に、家財道具を大阪築港に預けていましたが、すべて全焼しました。(大阪に住む) 近所の子も尾道に連れてきていたので「命びろいができた」と喜んでいました。

*【建物疎開】建物疎開とは、空襲により火災が周辺に広がるのを防ぐために、あらかじめ建物を取り壊して、防火地帯を作ること。(広島市 HP より引用)
華子さんによると、自宅周辺では尾道の浄土寺から西側は壊されていた、とい

います。
*【(第一次)大阪大空襲】3 月 13 日深夜、米軍機 B29 は合計 274 機、3 時間にわたり焼夷弾を投下した。死者 3987 名。

参考までに、終戦まで大阪市が受けた空襲は 28 回におよび、被害総計は次の通り。罹災区域 50.49 平方キロメートル(全市域の 27%) 死者 1 万 388 人 負傷者 3 万 5543 人 『大阪市戦災復興誌』大阪市役所(昭和 33 年) (「大阪市内で戦争と平和を考える」HP・大阪市HP 参照)

8 月 6 日に原爆が落ちたことは、近所の人々が「すごい爆弾が落ちたらしい」と噂していたので分かっていました。翌日に被爆した人が数名、電車で尾道に帰ってきました。皮膚がただれて、ぶらさがっていたのを覚えています。

他に戦争のことで覚えているのは、終戦間際に宣伝ビラが空から舞い降りてきたことです。たびたび撒かれていました。「見てはいけない」というおふれだったので見ていませんでした。もし人前で拾ったり、見ていたら近所の人から

白い目でみられていたことでしょう。

華子さんが見た宣伝ビラは、アメリカ軍が飛行機からまいた、「伝単^{でんたん}」といわれる空襲予告チラシのことだと思われます。そのビラには日本語で 32 都市の名前が挙げられており、あらかじめ空襲が予告されていました。そして、実際に福山を含む 18 の都市が予告通り空襲に遭いました。当時、思想および行動にたいする統制は厳しく、「伝単」はまやかしであるので見てはならないという強い指示があったので、ほとんどの日本国市民はそれを見ることはなかったといえます（福山市人権資料館職員さん談）。アメリカ軍は一般市民への攻撃をする前に警告をしていましたが、その警告が一般市民に行き届いていたわけではありませんでした。

8 月 8 日の夜 10 時、91 機の B29 が飛来し、福山市(当時)の 80 パーセントが焼きつくされました。

福山大空襲は、尾道からも空が真っ赤になっているのが分かりました。福山には連隊があったので、きっと空襲がくるだろうと言われていました。軍需工場^{ぐんじゅう}のある尾道もいつか空襲が起こるのではないかと心配していました。空襲警報が鳴るたびに、線路の下の小さい小川のほとりにある穴に隠れていました。それでも日本が戦争に負けるとは思っていませんでした。マイナスの情報は知らされていませんでしたから。

聞き取りを通して、華子さんをはじめ、当時本土を守っていた女性たちの声に耳を傾けると、「日本が負けるとは思っていなかった」という意見が大半でした。それは国民に正しい情報が伝わっていなかったことに原因があると思われます。当時「国家総動員法^{こっかそうどういんぽう}」という法律を元に、新聞や出版物に対する厳しい規制が行われていました。

福山空襲から一週間後、終戦を迎えます。

食べ物や着るものが無く苦勞しました。お店も売る商品が無いので商売ができませんでした。

昭和 21 年、食糧難に遭いながらも華子さんは念願の洋裁を学び始めます。尾道にある洋裁学校に入学し、一年間学びました。華子さんはその時の通知表を今でも大切にしています。

洋裁学校に通っている間、父親が復員し、尾道に帰ってきました。祖父はすでに亡くなっており、昭和 22 年に祖母が脳梗塞^{のうこうそく}で亡くなりました。商売は祖母が切り盛りしていたので、店は自然消滅しました。

育ての親である両祖父母がいなくなり、華子さんは生まれ育った尾道を離れます。華子さんは自立した女性として生きていき、その後再婚によって福山市で過ごすことになりました。

平成 28 年 5 月。華子さんは約 80 年ぶりに浄土寺の本堂に足を踏み入れました。

まさにここが、幼いころ日曜学校に通っていたところです。全然変わっていないわ。

浄土寺が開かれて 1400 年を記念して行われた特別な儀式を受けた後、華子さんは本堂から出てきました。その儀式とは、真っ暗闇の中、目隠しをし、仏が描かれた曼荼羅^{まんだら}に花を投げ、花が落ちた仏さまとご縁を結ぶ「結縁灌頂^{けちえんかんじょう}」という神秘的なものでした。

大好きな祖父母に育てられ、戦争中青春時代を過ごした尾道。80 年ぶりに訪れた浄土寺の本尊は、かつて少女だった華子さんを暖かく迎え入れてくれたことでしょう。

終戦半年後、南の島で餓死した父 戦後、父の弟と母の元で大切に育ててもらった

語り手 NY(女性)さん(73) 福山市今津町在住

大正 2 年 10 月	NY さんの父、生まれる
1942 昭和 17 年 8 月 14 日	NY さん ^{みつぎくんむかいしま} 御調郡向島町で生まれる
1944 昭和 19 年 7 月 24 日	NY さんの父 山口兵隊 入隊
1945 昭和 20 年 8 月 15 日	日本、降伏宣言
1946 昭和 21 年 1 月 12 日	NY さんの父 北ボルネオにて餓死

昭和 19 年 5 月、父が 2 度目の出征で^{うじなこう}宇品港から出港するのを、おばあちゃんに背負われて見送りに行きました。向島から船で渡って尾道駅に行き、汽車に乗って広島まで行きました。当時 2 歳だった私は「お母さんはどうして来ないの?」としきりにおばあちゃんに尋ねていたそうです。

身重だったお母さんは見送りを控えたのかもしれませんが。その 3 か月後の 8 月に、NY さんの妹を生んでいます。NY さんのお父さんは 2 番目の娘と対面することはできませんでした。

昭和 19 年 5 月に向島(現・尾道市)を出発した NY さんのお父さんは 7 月に山口県で入隊します。ボルネオ島にいつどのようにして行ったのか、またどのように過ごしていたのか NY さんは知りません。

日本が降伏宣言をした昭和 20 年 8 月から約半年後、NY さんのお父さんは日本から約 3600 キロ離れたボルネオ島で亡くなりました。「昭和 21 年 1 月 12 日 北ボルネオ西海州(ジェッ)セルトンにて戦病死 享年 34 才」と刻まれた NY さんのお父さんのお墓にお骨は入っていません。



現在、高級リゾートホテルが^{ねったいうりん}建ち、熱帯雨林の大自然を満喫^{まんきつ}する旅の起点として世界中から観光客がやってくるマレーシア国・サバ州の州都・コタキナバルはかつて「ジェッセルトン」と呼ばれていました。

1941 年 12 月、日本軍によるハワイの真珠湾攻撃をきっかけに太平洋戦争が始

まったとされますが、同時に日本軍はフランスやイギリスの植民地である東南アジア諸国を攻め始めました。1942 年にはイギリス領ボルネオを占領し、5 州 14 県に整理して「北ボルネオ」と名前を変え、その西岸を「西海州」としました(インドネシア研究者名古屋学院大学講師・佐伯氏談)。NY さんのお父さんは終戦を西海州の州都・ジェッセルトンで迎えましたが、終戦の知らせをいつ知ったのかも定かではありません。

父はボルネオ島で終戦を迎えました。「私も後から帰るからな」と日本行きの船に乗る仲間に手を振って港で見送った父は、その次の便で日本に還る予定でした。しかし予定していた船が到着する前に餓死したそうです。

太平洋戦争が繰り広げられた約 4 年間に約 230 万人の軍人・軍属(軍に関わる仕事に就いている人)が亡くなりました。そして、そのうち約 6 割の 140 万人の死因が餓死であったと聞いたら驚かれる方もいるでしょう。現在、広島県の人口は 280 万人。その数は県民の半数に相当します。

餓死が多かったのは NY さんのお父さんが亡くなったボルネオ島を含む東南アジアの地域でした。原因は、兵士達の衛生面や健康面を顧みず無理な計画を立てた軍司令部にあったともいわれていますし、敗戦間際に航路が敵軍によって遮られ、食料物資が届かなかったことが原因だともいわれています。(2014 年 8 月 15 日付毎日新聞デジタル版参照)

戦争が終わって間もなく、何か知らせのようなものを見て母が人目を忍び、苦しそうに泣いているのを見て、当時 3 歳ぐらいだった私は「ああ、お父ちゃんは死んだんだな」とぼんやり感じ取ったのがうっすら記憶にあります。その後、父のことは家庭内で特に話題に上がりませんでした。

唯一覚えているのは、自宅からすぐ近くにある(父方の)おばあちゃんの家に行く途中、近所の人が私と妹の頭をなでながら「ああ、あんた達がゲンちゃんに残した 2 人かあ」と言っていたことぐらいでしょうか。でも、「ゲンちゃん」の意味もよく分かりませんでした。

未亡人^{みぼうじん}となった母が再婚したのは戦争が終わって 2、3 年経った昭和 22 年か 23 年だと思います。再婚後授かった一番下の妹が生まれたのが昭和 24 年なので。

お母さんの再婚相手は、戦死した夫の弟でした。弟さんは向島の捕虜収容所^{ほりよ} *(p.23)で番兵をしていて、無事に終戦を迎えていました。四男である弟さんは農家の実家から会社勤めをしていました。



NY さん(左)と妹。昭和 22 年か 23 年頃。NY さん曰く「再婚の記念に撮影されたのではないか」と。

父方の祖父母は、未亡人となった母親と父の弟が一緒になるのがよいと思っていたのですが、なかなか言い出せなかったようです。そこで、地域の長老が母と父の弟に諭して、再婚の運びとなったと聞いています。

母親は養父の二学年上でしたが、養父のいうことを従順によく聞いていました。養父が三番目の妹と私たちに対して扱いが違うということは全くありませんでしたし、新しいお父さんだという違和感も全くありませんでした。むしろ戦争で亡くなった父親を意識することはありませんでした。父親の位牌は父方の実家の仏壇にありましたし、遺骨がなかった関係で 33 回忌を迎えるまでお墓を立てなかったことも関係しているかもしれません。

戦争で亡くなった父親の話題を養父と交わしたことのなかった NY さんですが、唯一、戦死した父親のことを口に出したことがありました。

養父が 81 歳の時胃がんが早期で見つかりました。「私のお父ちゃんは早死にしたんじゃけ、お父ちゃんはその分長生きしてね」と励ましたら、「ああ、そうか」と養父は言ったきりでした。それ以外、戦死した父のことは話題に上ったことはありませんでした。

戦後の食料不足の中、本家が農家ということもあって食べ物に困ることはなかった NY さん。「厳格」で「慎重」な養父の元、3 人の娘達は多少の紆余曲折はあったものの無事成長し、それぞれ結婚し、子供にも恵まれました。

NY さんが「宝物」だと言って見せてくれた写真には、娘夫婦 3 組、孫 5 人に囲まれ、妻に寄り添われた育てのお父様が中央で重々しく座っていました。その表情は威厳に満ち、着実に人生を歩んできた自信がにじみ出ているようでした。

近所でも「あのご夫婦はまた出かけている」と評判になるくらい、父が退職後もよく二人で色々な所に車で小旅行をしていました。

その写真は、まぎれもなく「本物の家族」を映し出していました。

3 年前、昨年と立て続けに養父様、お母様が亡くなられ、NY さんは戦争で亡くなられたお父様についてようやく考え始めている、ということです。

注：インタビューでは養父さんのことも「父」と言っていた NY さんですが、文章化するにあたり、戦死したお父様と区別するためここでは「養父」と記述しています。

*【向島捕虜収容所】

向島^{ほうせき}紡績は 1942 年 12 月、八幡^{やはた}仮捕虜収容所向島分所となり、1945 年 9 月閉所まで 216 名の戦争捕虜を収容していました。そして収容期間中に 23 名の死者を出しました。尚、2012 年に建物は解体され、記念のプレートは慰霊^{いれい}公園へ移設されました。そのプレートには以下の内容が刻まれています。

向島捕虜収容所跡

1942 年 11 月-1945 年 9 月

第 2 次世界大戦中、日本軍は東南アジア各地から多数の戦争捕虜を日本へ移送、国内 91 カ所に開設した捕虜収容所へ約 3 万 6 千人を収監^{しゅうかん}して鉱山、炭鉱、工場などでの労働にあたらせた。

この建物も戦時中は「広島捕虜収容所-第 4 分所」とされ、下記 216 名の連合軍将兵が収容されていた。終戦後解放されるまで捕虜たちは当地の造船所で資材運搬^{うんぱん}などに従事させられていた。

- ・1942 年 11 月 イギリス軍捕虜 100 名インドネシアより移送される、病気などで 23 名死亡。

- ・1944 年 9 月 アメリカ軍捕虜 116 名フィリピンより移送される。

- ・1945 年 8 月 終戦、翌 9 月、捕虜 193 名解放される。

「世界の恒久平和を願い」この史実を記す 2002 年 3 月

日英友好のモニュメントを建てる会

http://www.ononavi.jp/sightseeing/showplace/detail.html?detail_id=577 参照

(「捕虜がいるから尾道には爆弾は落ちないだろう」と予想する人もいたそうです。)

「父さんを戻して」という母親の遺言
島全体が墓場 最後の一柱まで本土に連れて還る
硫黄島遺族会広島支部の方々との交流を通して

- 1968 昭和 43 年 6 月 硫黄島、小笠原諸島と共にアメリカより返還される
- 1970 昭和 45 年 2 月 硫黄島の戦いの生還者である川相昌一さん、厚生省主催・硫黄島収骨調査に参加
- 10 月 硫黄島協会広島県支部結成
- 1971 昭和 46 年 12 月 硫黄島天山慰霊碑除幕式 県代表として井上忠二さん参加
- 1973 昭和 48 年 9 月 備後護国神社(福山市)に硫黄島慰霊碑建立 百名参加
- 1976 昭和 51 年 3 月 厚生省主催硫黄島天山慰霊碑前の儀式
- その後、備後護国神社における慰霊祭、硫黄島への巡拝・収骨作業が定期的に行われる
- 1991 平成 3 年 硫黄島遺族会設立
- 1994 平成 6 年 3 月 慰霊祭五十年祭
- 2000 平成 10 年 2 月 日米合同慰霊祭

(硫黄島で亡くなった方々が) 神になっているのか仏になっているのかは分かりませんが、無念のうちに亡くなっていった親父たちの供養のためにササキを捧げているのです。毎月福山の護国神社内にある慰霊碑にお参りしているので、よかったですらお越してください。



備後護国神社境内にある硫黄島供養碑(福山市)
毎月遺族によって献花、黙祷が行われている。

硫黄島遺族会の世話役を長年されてきた井上忠二さんに、著者が初めてお電話した時のお言葉でした。前回の聞き取りで伺った、硫黄島で玉砕した矢野卓衛さんの小隊に井上さんのお父様が所属していたご縁で、井上さんを紹介していただき

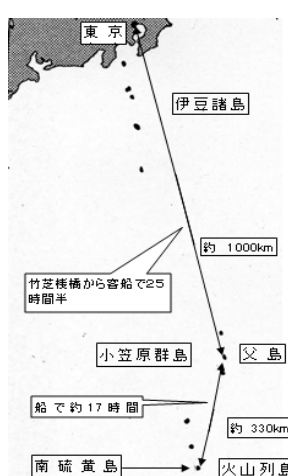
きました。冒頭の硫黄島慰霊碑は井上さんが中心となって設立され、遺族会の方々が毎月参拝し、交流を深める「場」となっています。井上さんは40年にわたり硫黄島で収骨作業をされ、渡航に際し外務省や厚生省と交渉するなど、硫黄島遺族会のために多大なる貢献をされています。

戦争遺族ではない著者が、遺族会の方々の「場」に立ち入るのはためられ

ましたが、戦争で大切な人を亡くすということはどういうことなのか、亡くなった方々の魂を慰めるということはどういうことなのかを身をもって体験するため、半年以上に渡り交流させていただきました。

著者が初めて慰霊碑参拝に参加した後、遺族会館の茶話会にも参加させていただきました。そこで井上さんは硫黄島の戦いからの生還者から伝え聞いたことや、ご自身が今まで調べたことを語って下さいました。

広島から硫黄島へ(約 2000 キロの移動)



東京都環境局HPより

父は 30 代のおじさん兵士だったんですよ。二度目の招集で広島市の西部二部隊に配属されました。矢野卓衛さん(当時 26 歳)の小隊に属していました。戦場である硫黄島に到着するために、まず糸崎、姫路を經由して東京に到着し、横浜から船に乗って父島まで移

動しました。硫黄島は断崖絶壁の島で適切な船着き場が無く、かつ魚雷も避けられるということもあり、上陸用舟艇(小型の船)に乗り換えて上陸しました。

陸軍と海軍

硫黄島の戦いには、陸軍と海軍が米軍に臨みました。ご存知の通り陸軍と海軍は基本的に指令系統は別です。

硫黄島では数多くの地下壕が掘られ、そこが活動の拠点となりました。全長は 18 キロにもなります。陸軍のトンネルはいかにも素人造りなのに対して、海軍は壕を掘る専門職がいて、海軍のトンネルは立派なものでした。

また、陸軍と海軍は食べ物までも違っていました。硫黄島はとにかく食べ物無く、どう確保するかが問題でした。陸軍は半合(一合=180 ミリリットル)を 4 人で分けて、おかゆをすすっていました。しかも硫黄の含んだ水をつかっていたので、兵士たちは下痢で悩まされていました。一方、海軍は食料が豊富に調達されており、陸軍兵士のあまりにも粗末な食事を見て憐れんだ海軍兵が、缶

詰の一部をおすそ分けするということもあったそうです。

徹底的な階級組織

軍隊は階級社会です。階級によって食事のレベルは違いました。また、たとえ上官が年下でも絶対命令です。もし逆らうものならビンタは当たり前。

こんなことも聞きました。命令に従わない兵士を木に登らせて、下から竹やりで尻をついていた中尉ちゅういもいたと聞きます。上官がどういう人間かによって兵士の状況も変わっていました。

ただ、硫黄島はほとんどが招集兵で、一般兵士は30代後半がほとんど。実際には、年若い上官たちは年上の部下たちを統制するのに苦労したみたいです。

始めから死を覚悟した戦い

そもそも陸海軍の本部は、硫黄島の戦いを最初から見捨てるつもりでした。そこに赴く上官達も死を覚悟していたと思われます。

硫黄島に上陸した米軍は圧倒的な攻撃力を持っていました。後ろから中尉によって自分たちに銃を向けられた部隊は、目の前の米軍の大型火炎放射機かえんほうしゃきに進んでいくしかありませんでした。これが美しく死んだといえるのでしょうか。

硫黄島協会広島支部設立へと

井上さんのお父様・清一せいいちさんは、子供5人と妻を残し、硫黄島の激戦で亡くなりました。父親を失った状態で戦後を迎えた11歳の少年・忠二さんは、母と共に家を切り盛りし、妹たちが無事成長し、進学することを見届けてきました。

それまで遺族活動にそれほど関わっていなかった井上さんを変えたのが、「父さんを戻して」という母が亡くなる前に発した言葉でした。

硫黄島の激戦で戦った約2万2千人の日本兵のうち、生きて還ることができたのはわずか千人。つまり21,000体もの遺体が島にとどまり、故郷の家族のもとに還ることがかなわなかったのです。井上さんのお父様もその一人でした。

おおよそ、日本人にとってお墓にお骨がない、ということはどういう意味を持つのでしょうか？仏教徒であれば仏壇に位牌を安置し、お墓にお骨を収め、亡くなった方の魂が安らかであるように祈り、残された者は心の平安を得ることができます。はるか南の島に無残な姿のままで風雨にさらされている夫を供養しようにもできないという、いかんともしがたい思いを長年抱かれていたお母様の無念が伝わってきます。

母親が亡くなったのは昭和43年のこと。私は硫黄島に残っている遺骨を故郷

に戻したいと思い立ち、硫黄島生還者である川相昌一さんを説得して硫黄島協会広島支部設立へと動き出しました。

ここに、川相昌一さんが硫黄島遺族会設立に関わるきっかけとなった、初めて遺骨収集に参加した時の様子について書かれた文章が残っています。

(前略)年移り昭和四十五年二月。再び来ることのない島と思っていた硫黄島に遺骨調査の要請を厚生省から受けて行きました。あの玉砕当時の裸の島は米軍による種をまかれたネムの木がおいしげり、その林の中に時折り鳴くウグイスの声はなつかしく、而しジャングルを潜り収骨団の手によって開かれた壕に入ると黄色い硫黄臭の湯気の立つ壕内は熱い地熱に十分も入ってられない。その壕底には奥へ奥へと続くご遺骨の列。二十五年前の戦斗時のままの姿。熱い地熱に蒸されて小さく、痛ましやこの姿。長い間御苦労様でした。誰も見てくれる者もいなかったでしょう。今ようやく故山に還られる日が来しました。私の硫黄島慰霊事業の関わりはこの時の場面に於いて決心がつけました。これこそ生還者の一生の務めであると心に決めて今日に至っております。(後略)

お母様の遺言の後、昭和46年に井上さんは川相さんと協力し合って硫黄島遺族会広島県支部を設立し、2年後には庵治石造りの慰霊碑が備後護国神社内に建立されました(写真)。その後、備後護国神社内における硫黄島戦没者のための供養祭、靖国神社参拝、遺骨収集などが定期的に行われるようになり、遺族の方々のつながりも深められていきました。

遺骨収集作業

【柱】(はしら) 神・霊または高貴の人を数えるのに用いる語。『広辞苑』

井上さんが初めて硫黄島で遺骨収集に参加したのは、硫黄島の戦いで生き残った方々と共にでした。お母様の遺言から3年後、昭和46年のことです。

初めて降り立った硫黄島で、生還者の一人に尋ねました。「おやじはどこにいらっしゃるのでしょうか？花をお供えしたいのです。」そうすると「場所なんてどうでもいい。どこでもいいから供えとけ！この島全体が墓場なんだ！」という激しい言葉が返ってきました。そうです。硫黄島は大勢の兵士がそのままの状態で眠っている墓場なんです。

硫黄島の南側のトーチカ（防御のためにコンクリートで作られた小屋）内で

遺骨収集作業をしていた時です。内側に入っても遺骨は見当たらないので外に出ようとして、何気なく壁に手を当てたら、バラバラとたくさんの遺骨が落ちてきました。米軍の激弾を直接浴びて壁に押し付けられてそのまま亡くなっていたのです。私は涙ながらそれらの遺骨を収集しました。

硫黄島で亡くなられた兵士の遺族の方々、ボランティアの方々の多大なる努力の結果、平成二十六年度末現在での収容遺骨数は、戦没者約 21,900 人に対し、10,350 柱となり、未収容は 11,550 柱となりました。(『今、何を語らん 平成 26 年度派遣報告書』JYMA 日本青年遺骨集団 参照)

前述の川相さんが遺骨収集を開始してから 45 年の間に実に 1 万体的ご遺体が発掘されたことになります。硫黄島は本州から南 1300 キロ離れた亜熱帯性気候^{あねったいせい}で、平均気温は 23.6℃。なおかつ島全体が活火山^{かつかざん}で地熱が高く、地下壕での発掘作業時には 40℃・50℃は当たり前、場所によっては 80℃になることもあるそうです。熱さとの闘いのなか、また、仕事があるなか 2 週間から一か月収骨作業に携わるといことは、どれほどの肉体的経済的困難を伴うか、その努力はいかばかりかと想像します。

ところで、太平洋戦争時、海外で亡くなった方は約 240 万名で、そのうち日本にまだ帰還できていないのが約 113 万柱といわれています。硫黄島に残る約 11,000 柱もその数に含まれています。主に遺族やボランティアに頼ってきた遺骨収集作業ですが、平成 28 年 3 月 24 日、戦没者の遺骨収集を「国の責務^{せきむ}」とし、一層の推進^{すいしん}を図ることを目的とした「戦没者遺骨収集推進法^{せんぼつしゃい こつしゅうしゅうすいしんほう}」が成立し、国の予算が計上されました。課題は山積みではあるものの、はっきりと国の事業として認めたことは意義深いことだといくつかの社説に掲載されています。(2016 年 2 月 16 日付沖縄タイムズ、同年 3 月 25 日付日本経済新聞参照)

とはいえ、井上さんは安心しているわけではありません。一年に二回、今まで 30 回近く硫黄島に渡り、遺骨収集に半生を費やした井上さんは硫黄島に眠る約 11,000 柱すべてを本土に持ち帰るという気持ちを持っています。

親父の骨はまだ戻っていないという確信があります。杖^{つえ}をついてでも確認したい。今まで私は足を棒にして調査してきました。私の残る余命はありません。遺族の皆さん、一つでも多くの遺骨を収集してください。

「国家の危急に身を捧^{ささ}げ傷つき仆^{たお}れても看護の手もなく暗い熱い壕の中で求むるものの何ものも与へられずして死に至った数多くの将兵。完全収骨はとて

不可能であり仍^よつてここに報^{むく}はれなかった硫黄島周辺を含めた戦没将兵^{ふくん}の武勲^{ぶくん}を讃^{たた}へ後世^{こうせい}にその戦史^{せんし}を伝^くへて永遠^{えいよう}の供養^{くよう}にと硫黄島戦没遺族^{いはいか}と生還者^{せいげん}相計りここに慰霊碑^{こんりゅう}を建立せり 昭和四十八年九月十七日 」(文・川相昌一氏)

備後護国神社内にある硫黄島慰霊碑は、亡き方と遺族を結ぶ、まさに慰めの「場」であり続けるでしょう。



東京都・千鳥ヶ淵戦没者墓苑
今でも花が絶えることが無い

国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑^{ちどりがふちせんぼつしゃぼえん}(東京都千代田区)は、先の大戦において海外で亡くなった軍人、軍属、一般邦人 240 万人のうち、氏名が判明しない戦没者のご遺骨^{いぼん}が納められている墓で、現在 36 万柱^{ちゆう}が奉安^{ほうあん}されています(国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑パンフレット参照)。硫黄島で亡くなった兵士達のほとんどはこの千鳥ヶ淵墓苑で静かに眠っています。

終わりに

戦後 71 年の 2016 年 5 月、現職のアメリカ大統領として初めてオバマ氏が広島原爆慰霊碑を訪れました。公式謝罪はなかったものの、原爆の非人道性を認め、亡くなった方々へ追悼の意を表しました。その後、氏が自ら折った鶴を面会した学生に手渡したという逸話を聞き、胸を熱くした方もいるのではないのでしょうか。一方、71 年前日本の植民地であった韓国や日本と戦闘状態にあった中国のメディアでは、オバマ大統領の訪問が「まるで日本が被害者であったかのような印象を世界に与える」といった否定的な報道もあったようです。

世界で初めて原爆が落とされ、その年の暮れまでに 14 万人が亡くなり今でも原爆症で苦しむ人がある日本は「被害者」なののでしょうか？また、朝鮮半島を含むいくつかの国・地域を植民地化し、多くの兵士や罪のない民間人を殺害した日本は「加害者」なののでしょうか？

自問自答を繰り返していた時、ある方の言葉に出会いました。その方は、15 歳で開拓団員として満州に渡り、19 歳で徴兵され、2 年間ロシアの極寒の都市で強制労働に従事した後、日本に帰還されました。

「戦争には勝者も敗者もなく、又加害者にもなり、被害者にもなるのが戦争です。その実態を目のあたりにしてきました。」

今年 90 歳を迎えたその方はつぶやかれました。

「『どうしておじいちゃん、あんな戦争に出たの？いやだって言えばよかったのに』と孫に言われたこともあります。今の価値観からすると信じられない、おとぎ話のようなものでしょう。しかし私は本気で国を守ろうと思っていました。今の人に伝わるのでしょうか」と。

最後に、小学六年生の感想文から。

「今は昔と比べると平和かもしれないけど、今が本当に平和か。と考えると違うな、と思います。だからまず自分がケンカなどをなくしたい」

戦争と平和についての考察はまだまだ続きます。

聞き取りに協力してくださった方々、校正をしてくれた家族、聞き取り冊子無料配布に理解を示してくださった檀信徒の方々に改めて感謝の意を表します。

合掌